

## 小学校3,4年生における人物画の大きさとコンピテンスとの関係

萱村 俊哉  
(武庫川女子大学短期大学部人間関係学科)

### The relationship between the size of human figure drawings and perceived competence in third- and fourth- grade elementary students

Toshiya Kayamura

Department of Human Relations,  
Mukogawa Women's University Junior College Division, Nishinomiya 663-8558, Japan

#### Abstract

The author investigated the relationship between human figure drawing size and perceived competence in third- and fourth- grade elementary students, considering sex differences. The results of this study were as follows. (1) The size of the figures drawn by males was significantly bigger than that of the figures drawn by females. (2) There was a close relationship between size of human drawings and perceived competence (academic and physical aspects). (3) Nevertheless, substantial sex differences existed in the relationship between them, indicating that it is important to consider sex differences in the clinical interpretation of children's human drawings.

#### 序 論

人物画検査では描かれた人物画の大きさに個人の何らかの心理特性をみいだそうとする試みがある。人物画の大きさは容易に測定できる客観的指標である。したがってそこに何らかの心理特性が表わされるとすれば、人物画の大きさは臨床的に意義のある指標といえるだろう。この点に関する古典的な研究としては、たとえば大きな人物画を描く者はセルフエスティームが高い(Swensen, 1968)、あるいは人物画の大きさが中程度の者のセルフエスティームが高い(Koppitz, 1968)などの指摘がみられる。これらの研究では、人物画の意義は認められるものの、その解釈、すなわち大きな人物画を描く者のセルフエスティームが高いのか、あるいは中程度の大きさの人物画を描く者のセルフエスティームが高いのかという点では結論が異なる。元来、人物画の大きさと心理特性との関係についての系統的研究は多くはなく、この点を含め両者の関係については現在でも不明な点が多いのである。

このため筆者は健常者における人物画の大きさと心理特性との一般的関係を明らかにすることを目標に、まず女子大学生を対象に人物画の大きさと身体満足度との関係について検討した(萱村, 2010)。その結果、小さな人物画を描く者よりも大きな人物画を描く者の身体満足度(内臓機能の満足度)のほうが高いとの所見が得られ、青年期女子では人物画の大きさにその人の内臓機能の満足度が反映されること示されたのである(萱村, 2010)。青年期の人物画の大きさにはこのように意義が認められた。それでは青年期以前の児童期では人物画の大きさに何らかの心理特性が反映されるのだろうか。また、児童期でも青年期と同様に大きな人物画を描く者のほうが良好な心理特性を示すのであろうか。これらの問題意識に基づき、青年期を対象とした研究に続き、本研究では児童期における人物画の大きさと心理特性との関係について検討することにした。

児童期における人物画の大きさに関する先行研究(Koppitz, 1968, 桜井・杉原, 1986, 桜井, 1988)では、

人物画の大きさと自尊感情あるいはコンピテンス(有能観)の一部とは関連があることが指摘されている。そこで本研究ではこれら先行所見の所見を再確認することを目的に児童における人物画の大きさとコンピテンスの関係を検討する。また今回は、10歳前後の小学校3、4年生を対象にするが、この年齢の子どもたちを対象にする理由は2つある。一つは、上述の先行研究で対象とされたのは幼児や小学校高学年の子どもたちであり、小学校3、4年は対象とされてこなかったことが挙げられる。もう一つの理由としては、8～10歳は思春期の開始期にあたり、コンピテンスを含む自己意識の形成上、重要な時期であることが挙げられる。

ところで、いくつかの先行研究(たとえば、萱村・川端、2000)において、女子より男子のほうが大きな人物画を描く傾向があることが指摘されている。このため本研究でもこのような性差の存否を検討する。さらに人物画の大きさとコンピテンスとの関係についても性別に分析する。本研究でもこれら性差の存在が証明されれば、臨床検査として人物画検査を用いる場合、性差を念頭に解釈する必要性が示唆されることになるだろう。

## 対象と方法

兵庫県下の小学校3、4年生151名(3年生男子44名、同女子39名、4年生男子38名、同女子30名)を対象とした。予め研究の主旨や倫理面での配慮などを記した紙面を用いて小学校側に説明を行なった。検査内容の修正の後、研究の承諾を得た。以下に実施した2種類の検査を示す。

- 1) 自己像描画テスト(Self Image Drawing Test, 以下SID) : A4の大きさの紙(黒枠入り)を与え、「枠の中にあなた自身の姿の絵を描いてみてください」と教示した。今回は描かれた自己像の「像の高さ」、「頭部の高さ」及び「胴の幅」の長さ(mm)を測定することにより定量的に評価した。さらに「像の高さ」の値に「胴の幅」の値を乗じて、人物画が描かれた空間の面積(mm<sup>2</sup>)を算出した。
- 2) コンピテンス測定尺度 : 桜井(1983)が作成したコンピテンス測定尺度を一部変更して用いた。桜井(1983)の尺度は全28項目で、4段階評定であった。しかし、研究協力いただいた小学校側との打ち合わせの中で、生徒への心理的配慮や回答しやすさをさらに考慮するようにとの要望が出された。このことを受けて、最終的に8項目減じ全20項目とし、回答法も4段階評定を「はい」と「いいえ」の2件法に変更した。20項目は①学習、②運動、③社会性、④自己価値という4つの下位尺度で構成され、これら下位尺度は各5問から成っていた。

## 結 果

### 1) 人物画の大きさにおける学年差と性差の検討

SIDが遂行できなかった者が7名みられた。さらにコンピテンス尺度の回答に不備のみられた者も2名みられたので、以下の分析はこれら子どもたちを差し引いた残り142名(3年生男子41名、同女子36名、4年生男子37名、同女子28名)の結果に基づいて行なわれた。「像の高さ」、「頭部の高さ」、「胴の幅」の3指標のサイズ(mm)、及び「像の高さ」のサイズに「胴の幅」のサイズを乗じて算出した人物画が描かれた空間の面積(mm<sup>2</sup>)の結果をTable 1に示す。SIDにおける像の高さ、頭部の高さ、胴の幅、面積の4指標を従属変数にして学年(2)×性別(2)の分散分析を行った結果、全指標において性の主効果がみとめられ、いずれの指標も女子よりも男子のほうが大きいことが判明した(Table 1)。

### 2) 人物画の大きさによる対象者の群分け

SIDの4指標について、平均値から-1SD未満(I群)、-1SD以上～+1SD未満(II群)、+1SD以上(III群)の3群に対象者を分類した。ただし4指標ともに学年差は有意ではなかったものの、性差については有意であることが認められた(Table 1)ため、この対象者の群分けは、学年は込みにして男女別に行った。その結果、各群における人数内訳は次の通りとなった。男子では、像の高さ：I群14名、II群49名、

Table 1. 学年別, 性別にみた SID の結果

				ANOVA (F)		
		3年生	4年生	学年	性別	交互作用
像の高さ(mm)	男子	14.29 ± 4.08	15.45 ± 3.61	.80	8.10 **	.81
	女子	13.03 ± 4.01	13.03 ± 3.43			
頭部の高さ(mm)	男子	4.46 ± 1.52	4.17 ± 1.67	.87	7.75 **	.10
	女子	3.74 ± 1.13	3.59 ± .98			
腰の幅(mm)	男子	2.42 ± .96	2.95 ± 1.15	2.70	8.65 **	2.14
	女子	2.17 ± 1.03	2.20 ± .76			
面積(mm <sup>2</sup> )	男子	36.92 ± 20.87	48.35 ± 28.29	1.67	8.82 **	2.60
	女子	31.57 ± 24.14	30.31 ± 17.02			

(注1)  $df=(1,138)$

(注2) \*\* $p<.01$

Ⅲ群 15名, 頭部の高さ: I群 14名, II群 50名, III群 14名, 腰の幅: I群 8名, II群 57名, III群 13名, 面積: I群 7名, II群 58名, III群 13名, 一方, 女子では, 像の高さ: I群 12名, II群 41名, III群 11名, 頭部の高さ: I群 8名, II群 49名, III群 7名, 腰の幅: I群 7名, II群 48名, III群 9名, 面積: I群 4名, II群 51名, III群 9名となった。

### 3) コンピテンス下位尺度の内的一貫性の検討

コンピテンス測定尺度の4下位尺度のそれぞれについて $\alpha$ 係数を算出した結果, 学習 .68, 運動 .64, 社会性 .37, 自己価値 .51 となった。学習と運動はある程度の内的一貫性が確認されたのに対し, 社会性と自己価値に関しては十分な一貫性が確認されなかった。したがって以下の分析では, 従属変数として学習と運動のみを採用し, 社会性と自己価値は不採用とした。なお, 以下では, コンピテンス測定尺度の中の学習と運動をそれぞれ, 学習コンピテンス, 運動コンピテンスと称することにした。

### 4) 人物画の大きさと学習コンピテンス, 運動コンピテンスとの関係

SIDの4指標(像の高さ, 頭部の高さ, 腰の幅, 面積)の群(I, II, III)別の学習と運動のコンピテンスの得点を, それぞれ男女別に Table2 ~ 5 に示した。これらの Table をみると, 全体としては, 男子で

Table 2. 人物画の大きさと学習コンピテンスの得点との関係 男子

		I	II	III	ANOVA (F)	多重比較
SID	像の高さ	2.64 ± 2.13	3.04 ± 1.66	3.07 ± 1.39	.32	
	頭部の高さ	3.71 ± 1.73	3.12 ± 1.65	1.71 ± 1.14	6.14 **	III < I, III < II
	腰の幅	3.88 ± .99	2.86 ± 1.79	2.92 ± 1.50	1.28	
	面積	4.00 ± 1.00	2.84 ± 1.76	3.00 ± 1.58	1.48	

(注1)  $df=(2,75)$

(注2) \*\* $p<.01$

Table 3. 人物画の大きさと学習コンピテンスの得点との関係 女子

		I	II	III	ANOVA (F)	多重比較
SID	像の高さ	2.75 ± 1.71	2.83 ± 1.33	4.00 ± 1.10	3.32 *	II < III
	頭部の高さ	2.38 ± 1.77	3.12 ± 1.32	3.14 ± 1.77	.97	
	腰の	3.86 ± 1.07	2.73 ± 1.41	4.00 ± 1.12	4.87 *	II < III
	面積	3.50 ± 1.00	2.82 ± 1.44	4.00 ± 1.12	3.02+	II < III

(注1)  $df=(2,61)$

(注2) \* $p<.05$ , + $p<.10$

**Table 4.** 人物画の大きさと運動コンピテンスの得点との関係 男子

		I	II	III	ANOVA ( <i>F</i> )	多重比較
SID	像の高さ	2.57 ± 1.70	2.04 ± 1.47	2.13 ± .99	.74	
	頭部の高さ	2.43 ± 1.83	2.12 ± 1.41	2.00 ± 1.11	.35	
	腰の幅	3.38 ± 1.41	2.09 ± 1.42	1.69 ± 1.18	3.91 *	III < I
	面積	3.14 ± 1.57	2.09 ± 1.45	1.92 ± 1.12	1.95	

(注1)  $df = (2,75)$ (注2) \*  $p < .05$ **Table 5.** 人物画の大きさと運動コンピテンスの得点との関係 女子

		I	II	III	ANOVA ( <i>F</i> )
SID	像の高さ	2.08 ± 1.31	2.22 ± 1.43	4.00 ± 1.10	.98
	頭部の高さ	2.25 ± 1.49	2.27 ± 1.41	2.57 ± 1.27	.15
	腰の幅	2.57 ± 1.27	2.23 ± 1.39	2.44 ± 1.59	.24
	面積	3.00 ± .82	2.22 ± 1.39	2.44 ± 1.59	.64

(注1)  $df = (2,61)$ (注2) 1 要因分散分析の結果はすべて非有意 ( $P > .05$ ) であった。

は小さな人物画を描く者のほうが、一方女子では大きな人物画を描く者のほうが学習や運動のコンピテンスが高い傾向がみられた。SIDの群を独立変数とし、学習と運動のコンピテンス得点を従属変数として1 要因分散分析を行った結果、学習コンピテンスに対しては、男子では頭部の高さが、一方女子では像の高さ、腰の幅が有意な主効果を示し、面積は有意傾向を示した。つまり、男子では頭部の高さの短い人物画を描く者のほうが、女子では像の高さや腰の幅が長く、面積の大きい人物画を描くもののほうが学習コンピテンスの得点が高いことが明らかになった (Table 2, 3)。多重比較 (Dunnett T3) を行った結果、Table 2 では頭部の高さが短い I 群と中程度の II 群は、それぞれもっとも高さが長かった III 群に比べ学習コンピテンスの得点が有意に高かった。一方、Table 3 では、有意な主効果、あるいは有意傾向のみられた像の高さ、腰の幅、面積のすべてにおいて、もっとも大きく描いた III 群のほうが中程度の大きさであった II 群に比べて学習コンピテンスの得点が有意に高かった。

運動コンピテンスに対して有意な主効果を示したのは男子の腰の幅 (Table 4) のみであり、それ以外は男女ともに有意な主効果を示す指標はみられなかった (Table 4, 5)。Table 4 の腰の幅において多重比較 (Dunnett T3) を行った結果、腰の幅の描出がもっとも細かった I 群のほうがもっとも太い腰を描いた III 群に比べ有意に運動コンピテンスの得点が高いことが明らかになった。

## 考 察

人物画の大きさは測定可能な客観指標である。このため、もし人物画の大きさに何らかの心理特性が表現されるのであれば、その臨床的意義は小さくはないと考え、本研究では児童期に焦点を当て、人物画の大きさとそれを描いた子どものコンピテンスの関係を検討した。以下では主に臨床的視点からその意義や検査結果の解釈上の留意点について考察する。

ネパールと本邦の子どもたち (8~9 歳) による人物画の比較文化的研究 (萱村・川端, 2000) では、ネパール、本邦の小学生ともに自分と異なる性別の人物画よりも同性の人物画の方を大きく描く傾向があるものの、全般的には女子より男子の方が大きな人物画を描くことが指摘されている。今回も人物画の大きさにおける性差について検討した結果、女子より男子のほうが大きな人物画を描くという所見が得られ、小学校 3、4 年生では女子より男子のほうが大きな人物画を描く一般的傾向があると考えられた。このため、この年齢域の子どもを対象とした人物画検査の解釈では、このような人物画の大きさでの性差が本来的に存在することを念頭においておく必要があると言えるだろう。

先行研究 (Koppitz, 1968, 桜井・杉原, 1986, 桜井, 1988) では、幼児や小学校高学年の児童において

人物画の大きさと自尊感情あるいはコンピテンスの一部とは関連があることがすでに指摘されている。この所見について小学校3, 4年生を対象に再検討することを主な目的とした本研究の結果、小学校3, 4年生でも人物画の大きさとコンピテンスとの間に関係がみられることが判明した。小学校3, 4年、すなわち10歳及びその直前の年齢域は思春期の開始期にあたり、コンピテンスを含む自己意識の形成において重要な時期である。人物画検査によりこの時期のコンピテンスの一端を知ることができるという意味において、人物画検査の臨床的意義が改めて示されたと言えるだろう。

しかしながら人物画の大きさとコンピテンスの関係には際立った性差が認められた。すなわち、全体的には男子では小さな人物画を描く者のほうが、女子では大きな人物画を描く者のほうが学習や運動のコンピテンスが高い傾向が認められ、その上、学習や運動コンピテンスと関連がみられた人物画指標の種類やその方向性(人物画が大きければコンピテンスが高いのか、あるいはその反対かなど)は男女の間で違いがみられたのである。具体的には、男子では頭部の高さを短かく、あるいは中程度の長さに描く者は、それを長く描く者に比べ学習コンピテンスが高かった。さらに腰の幅を細く描く者は、太く描く者に比べ運動コンピテンスが高かった。これに対し女子では、像の高さを長く描く者のほうの学習コンピテンスが高く、腰の幅を細くあるいは太く描く者のほうが、中程度の細さに描く者よりも学習コンピテンスが高いことが明らかにされたのである。これらの所見は、人物画の大きさという指標は、コンピテンスとの関係において性差を念頭においた解釈が求められることを示唆している。

今回認められた性差の内容はこのように複雑であり、性差が表れた理由を考察することはきわめて困難といわざるを得ない。したがって、このような性差が表れた理由の解明は今後の課題としたい。

## 要 約

小学校3, 4年生を対象に人物画の大きさとコンピテンスとの関係について、性差を考慮し、臨床的視点から検討した。人物画検査(SID)では「像の高さ」、「頭部の高さ」、「胴の幅」、「面積」の4指標を調べ、いずれの指標も女子よりも男子のほうが大きかった。人物画の大きさと学習、運動コンピテンスとの関係も認められたが、そこには性差が存在し、全体的にみると、男子では小さな人物画を描く者のほうが、女子では大きな人物画を描く者のほうが学習や運動のコンピテンスが高い傾向がみられた。さらに学習や運動コンピテンスと関連がみられた人物画指標の種類やその方向性(人物画が大きければコンピテンスが高いのか、あるいはその反対かなど)において男女の間で違いがみられ、その違いの内容は複雑であった。人物画の大きさという指標は、コンピテンスとの関係において性差を念頭においた解釈が求められることが指摘された。

## 文 献

- 萱村俊哉・川端啓之(2000)ネパール・パタン市児童の人物画：ネパールにおける健康教育モデル構築のための資料として武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編) 48, 29-38
- 萱村俊哉(2010)女子大学生における人物画の大きさと身体満足度との関係、武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 58, 93-98
- Koppitz, E. M. (1968) *Psychological evaluation of children's human figure drawings*. New York, Grune & Stratton.
- 桜井茂男(1983)認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成, 教育心理学研究, 31, 245-249
- 桜井茂男・杉原一昭(1986) 児童における人物画の大きさと有能感およびホープレスネスとの関係—枠づけ法を用いて— 筑波大学心理学研究, 8, 73-80
- 桜井茂男(1988) 幼児における有能感と人物画の大きさとの関係：枠づけ法を用いて, 教育心理学研究, 36, 63-66
- Swensen, C. H. (1968) Empirical evaluations of human figure drawings. *Psychological Bulletin* 20-44.

付言：本研究は平成17～18年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「軽度発達障害児の身体図式と自己認

(萱村)

知に関する臨床発達心理学的研究(課題番号 17530495)」(研究代表：萱村俊哉)により遂行された。